

身を大切にせざるべからず。また子たるもの貴賤
 貧富を論せず、永く此世の快樂を享けんと欲せば
 宜しく身体を健全にし、能く業務を勉勵し、以て
 至仁至愛たる母の心を安んぜざるを得んや。

(おはり)

Look in fear upon the guilt that
 might have been thine own.

恐を以て、己の陥らんをせし
 罪惡の上に眺めよ。

夏の家庭



や、て、

團 變。ストーブの下、火鉢の邊、快談相親しむ
 冬の家庭は、げに温かきものなるも、夏の家
 庭亦一入のものにして、今や正に盛夏。學校は凡
 て休暇となり、笈を遠きに負ふの子弟も歸省し、
 一家團樂、綠翠滴たる樹蔭、涼風送くる窓下、あ
 どけなき幼兒の御伽話、活氣はやれる青年の夢想
 或は希望を語るあり、或は經驗を述ぶるあり、子
 女の進歩は其の話頭に表はる、家庭の幸福和樂何

物か之に如かん。

睡

眠。安逸を貪ぼるはこれ人情の常、今や始業に後る、恐なく、明日の豫習の必要なし、茲に

於て朝寢と午睡と行はる、かくて神身保養の休暇は反つてこれが懦弱を來たす。睡眠八時間を以て足れりとす、此理兒童の能く知れる所、されど之を已に制する頗る難、父母兄弟の宜しくつとめ監督すべきの事。

朝

顔の栽培。睡眠を節する頗る難、されど、小供に之を強ゆるなくして、却つて彼等をして樂

んで實行せしむる一手段あり。即ち朝顔の栽培なり。露を已が友として、朝な、夕な、に咲き出づる花を見ては、彼等の心中自ら美感を養はる。加之彼等自らに播種せしめ、水まかしめんか、植物生長の次第は彼等能く之を會得す。更に進んで其の花

の解剖を行はしめ、結實の有様を觀察せしめんか、彼等の得る所其幾何ならん。

金

魚の飼養。これ亦彼等に娛樂を興ふると共に魚類につきての知識を興ふるもの也。陶汰に

依りて其の形色の變化する有様、其の進退するに如何なる作用を以てするか、各鱗特種の作用等は外見上直ちに之を説明するを得るなり。更に進んで其の体の構造、其の生理作用等を述べて彼等をして精細に之が觀察をなさしむるに至つては一尾の金魚の興ふる知識實に偉大なるべきなり。

虫

の飼育。これ亦博物學の智識を興ふるもの。庭前の草木撒水に蘇生の色を呈し、人皆晚餐

終りて夕涼晝の苦熱を忘れ、蚊遣火の邊、團扇に風を起こし、長幼相談するの時、擔馬の音に和して鳴き出る鈴虫松虫、がちや、ちや、さり、さり、其

の音の自然なる、其聲の清韻なる、樂的の趣味は自らに養成せらる。更に之を博物學的に觀察せんか、彼の美音は彼等の口より發する聲にわらずして、實に其の翼が頗る敏捷に相接觸摩擦するより生ずるを見るなり、此等の現象實に興味深きもの。

虫

聲につさての聾。リン／＼の鈴虫の聲は其の調子甚だ高くして、吾人の耳朵をうつや頗る

強し。然るに全く之をさへ得ざる人あり、しかも此人や低聲の談話も、遠方の鳥聲も能く聞くなり、是れ實に心理上面白き現象なり。抑も吾人の聞き得る音には上下共に限界ありて、低きに過ぐるも、高きに過ぐるも之を知覺する能はざるなり。而して其の限界の度は人々之を異にす、此人の如きは高調子を聞き得る度普通よりも甚だ低きにあるなり。故に虫聲の如き、笛聲の如き高調子のものは

之をさく能はずして却つて低聲は之をさく得るなり、世此類の人多からん、幸に諸君の觀察を待つ。

旅

行。休暇は「ヤスミ」なり、然りと雖も唯平生の業務を休みて心身を保養し、他日大に爲すゝの英氣を蓄積するを意味するのみ、徒らに睡眠と飲食とを以て之を送るの言ひにわらざるなり。

されば日夜業務に忙殺せられて吾人の心神に慰安を與ふる能はざるの士、豈に此の好機を逸すべけんや。一家族を携へて旅行するも可、一二員のみにて旅行するも可。純潔なる自然に對して造化の大秘を尋ね、太極の玄妙を悟り、未見の事項形勢を探知し、精神的に無限の快味を發見し、幾多の新智識を領得し、生理的に活潑なる運動として体力を鍛鍊し、苦難と戰ひて堅忍不拔の精神を養成す。且つ其の之を回顧する時、亦た頗る愉快を

覺ゆ、しかも其の愉快の程度は、旅行當時の困難と比例するなり。

附言す。余が言ふ旅行は今日流行せる所謂紳士輩の避暑旅行にあらざるなり、彼等のどこまでも柔弱にして猥穢、駄小説を晝寝の仰に終日を送る是れ吾人の意味するものにあらざるなり。

海 水浴 四面水を環らす我國現時の夏は實に海岸にあり。松青く沙白き邊、清澄の氣に逍遙

し、波穩やかなる海水に浮沈する、人世の快事何物か之に如かん。海水浴の利益は吾人之を次の四者に見る、曰く生命の保護、曰く膽力の養成、曰く軍事上の利益、曰く通商上の利益、しかも現時世界各國の輸贏を決すべき大舞臺は、我が東洋に在るに於てをや。海事思想の發展は忽諾に附すべからざるなり。一家の團樂を此の秀靈の地に移し、

此の思想を養ふと共に、海岸の發達が如何に人世に影響するか、海水と氣候との關係、其の地方を構成せる岩石の種類、其の土の動植物等につきて研究し、之を子女に知らしむ、其の効實に偉大なり。更に進んで渺茫涯なきの大洋、行帆點々、走烟片々。地脈中斷し、斷岬相對するの所、危礁巖り、怪巖峙つ、凸兀糾紛、既に瑰偉峻峭を曲盡するあり。潮流奔馬の如く、其間に躍動し來り、亂濤相闘ふの間、水蒸氣飛噴し、水面常に雲霧を吐き、幽暗の景を添ふるに至つては、雄大、崇高、卓厲、豪宕の氣自ら養はるゝなり快なる哉夏の海岸。

茲に夏の家庭を草す。

水と人生

川口孫治郎

水の雨潦、溪流、野水などとして、底淺き低地に相會するや、雜草と相伍して、薄平たく慈ひて此處に澤となり、

太地の隆起の不同ありし其凹に、或は地震、伏流等の爲に地層の陥落せる彼窪に、或は息火山の舊噴火口に、或は流域の變遷の爲に殘されたる舊河道に、上より流れ込みて、若くは底より湧き出で、或は圓く、或は長く、或は方に、或は歪み或は淺く、或は深く滙溜して、其處に湖となり、泥深き低地に淺く滯留して沼をなし、人工によりて堤の内に堰き止られて灌漑の爲に池をなし、粧點の爲に庭園に溜められて泉水となり、飲料の爲に掘抜かれたるに湧き出で、井戸となり、掘割

に壅塞せられて濠池となり、疏通せしめられて運河となる。

小川あり、溝あり、流れて湖沼池澤濠渠に入り満ちては、更に滾々として溢れ出て、川をなし、岐れて復た小川となり溝となり、合して又遂に大河長江となる。

源泉滾々不_レ舍_二晝夜_一、盈_レ科而後進、放乎四海、げにや、水の行動は、投機者流の一足飛びの亂行に非ず、生意氣青年の病的奮進の備に非ずして、自然の情理に基し、必至の經濟に因れる、健全なる、秩序ある動作なり、亂世に於ける覇者の野心に非ずして、萬世不磨の王者の心事なり、暗黒時代の山師に非ずして、文明社會の大成_〇功_〇者_〇の秘_〇訣_〇を示せるものなり。

楊柳あり、蘆葦あり、蘭あり、蓮あり、菖姑、

澤瀉、菱、河骨などあり、渺茫たる稻田萬頃あり水の爲に榮えつゝあるなり。

鷺あり、水鶏あり、翡翠あり、鴨、鴨、鵠、鴛鴦雁あり。川鼠、鮎、鰻の棲めるあり、油斷すべからざる鰐、河馬などの潜めるあり、愛すべき鯉、鮎、鮎、鱒、鰻、鮎より、鱒、丁班魚の輩に至り、蟹、龜、蛙、螟蛉、などを先登として、蜆、蚌、赤螺、田螺、線香虫を中堅とし、子子、紅蟲などの一族郎等を後陣として、此等の間に起る凡ての活劇は、亦水の邊、水の中にて演ぜられつゝあるなり。

太古の民、溪に向いて、始めて交通の不便を感ず、偶、僵木あり斜に流に架す、乃ち相携えて渡る、細溪川の丸木橋即ち之れなり。漸く居を定むに及びて、所在の石を利用して石橋こゝに起り、

更に進めば、木を横たへ枝を敷き土を載せ芝を植ゑて土橋乃ち始まり。更に進みて、鋼鐵の刃の使用に熟すれば巧に工夫したる木橋、石橋となり。時に煉瓦橋となり。遂に鉄橋となる。此橋々や、これ、吾人類が、交通運輸の爲に、水に凌駕し架したるものなり。

素戔鳴尊、浮竇ヲ作り韓國ニ往來シ云々、浮竇とは船なり、彦火火出見尊ハ無目籠ヲ用ヒテ海國ニ往キ云々、編み舟の時代なり。近時尙蝦夷人の用ひし丸木舟時代亦之と相前後し。漸くにして釘を用ひて組立つるに至る、平田舟の如き今の漁船の如き即ちこれなり、次で、金屬張の船舶、鋼鐵の艦艇を工夫し、遂にアルミニウムの雷艇を出さんとす、これ、人類が、水を巧に利用して交通運輸の便に供し、以て其發展を逞うせる一なり。

滄浪之水、清兮可三以濯我纓、濁兮可三以濯我足、清濁又各取るべき所ありて、共に清淨の用に當るに足る。之を灌溉の用に供して、田園萬頃、花木穀草、穰々繁茂し、萬民歡呼の響こゝに起る。

古封建時代の諸侯が、濠を穿ち之に水して、以て敵を防ぎたるは、水を逆に利用したる一例にして、今は疏水工事を起して、水の源淵を涵らして地を農業上に利用し、同時に、其謝出する水を工業上に宏大に應用するに至る。

精出せば、凍る間もなし、水車、

之れ、初歩の勞力利用なり、次の利用は、齒輪、帶革に移すにあり、更に進みたるは、發電の原動力として作用せしむるに在るなり。

古人曰く、盛徳之士、體無不具、故用無不周、と果して然らば、水も亦盛徳の士なる哉。

此盛徳の士、王者の懷を有する水も、一朝悍然として靜に慍れば、一滴よく幾百數の病根を包含して巨萬の人命を奪ひ去り、赫として茲に一たび怒れば地上の萬物舉げて一面の泥の海となる、咎むる勿れ、怪むなかれ、文王一たび怒れば天下平なるに非ずや。

(未完)

支那人に對する幼兒の考

ひさ子

▲事柄は少し古いやうですが、それが今に至るまで、又之からも永く影響する事なので、少し書き出して見ませう。

▲日清戦争の時の我軍の大勝利は、實に愉快なうれしい事で、其當時には女の私でさへも、肉がをとり血もわきまとして、號外を見る毎に心で我軍の

萬歳をとなへました。あ、併し相手である支那人の方ではどんなでございましてせう。

▲日本人が喜ぶべき側ばかりから見れば、實に壯快な活潑な此日清戦争は、已に其時に一廉の大人となつて居つた人には勿論、まだ十分譯の分らない幼児にまでも、随分いろ／＼の精神的影響を與へ、之を教育しました。ほんとうに戦争が國家、社會、人、幼児に影響し、之を教育することのなか／＼甚しいといふ事は、いまでも申すまでもございませぬ。

▲處が其當時まだ生れて居らなかつた幼児、即ち明治二十八年以後に生れた幼児でさへも、此戦争の影響をうけて居ることは随分つよいものでございませぬ。

▲又戦争の當時に立ちかへりますが、一体あの戦

争の時、現に我軍が彼地で連戦連勝して居る時に我國では其祝に随分さわぎました。戦つて勝つ、勝つて喜ぶ、喜で祝ふといふのは人情の然らしむる處で、別に悪くはございませぬが、其さわぐ時に、自國の勝を祝ふ序に、彼國の負けたのを嘲けるやうな者や、いかにも向を侮りさつたやうな模様もあつたやうにさゝました。

▲又あの時にはやりました軍歌、は一方ならず、大人と言はず幼児と言はず、凡て人の心をあふぎ立て引き立てましたが、眞に勇壯な活潑な自然に忠君、愛國、尙武の氣象の養はれる有益な歌の方が多くございましてけれども、中には随分大人氣ないひとりのもございましてた。

▲口には中華と誇れども心の野蠻は反比例であるとか、經遠知遠と只われ猛く名のりて誇れど其甲

變なくて己の國だに守りもあらずへとか、いかにも向を愚であると言はぬばかりの歌も二三見えました。

▲勝て兜の緒を締めてこそ、奥床しくもあり、又後來の爲にもなりません、已に勝ちほころといふはこる處まで進むと、もう其結果の内にはうれふべき分子が含まれませう。日清戦争の時に大人が勝に乗じて其勝利にはこつた影響が、いろ／＼ある中に極小さい幼児にまで及で居る事も随分ございます。

▲まづチャン／＼坊主といふ詞、之は只こゝに書くのでさへも大人氣ない詞ですが、此詞がどんなに廣くひろまつて居りませうか。私は日清戦争よりもズット前に、一時大にはやつた「日清談判破壊して」といふ俗歌の中に「遺恨重なるチャンチ

ヤン坊主」といふ詞をはじめて聞き、いやに感じた事がございしますが、其頃にはそんなにだれもがいふといふ風に擴まつては居らなかつたやうに思ひます。

▲それが日清戦争以來急に此詞は擴まつたやうに思ひますが、どうでございませう。心ある父母、考ある家庭に育てられた兒はそうでもございせんが、教育思想のない下等社會の父母に育てられて居る幼児は、今でも此詞を口にして居ります。そうして只無邪氣に言ふのもあり、又一種支那人を輕侮するやうな考をもちながら言ふのもございします。

▲私は一保姆で、毎日幼稚園で、下等社會の幼児と共に暮して居るものでございしますが、毎年新しく入れます幼児の口から、此チャン／＼坊主とい

ふ詞をさかぬことはございませぬ。そうして「そ

ういふものではない支那人と言ふものである」と教へて、此詞の跡を絶つには随分永くかゝります

▲又日本勝つた支那負けた、といふ詞も随分申します。之は實際をうであつたのですから、其詞は

別に悪くはございませぬ。けれども、こういふ些細な事から、日本人は怠けて居つてもどうしても、

別に一生懸命に勉めなくても、之から先でも、當然支那人には勝てるものである、支那人といふものは日本人と戦へばきつと負けるものである、と

いふやうな油断の心や誤つた断定が、もしも幼児の心に萌しましたならば、それこそうれふべき事

であると思ひます。

▲調だけならばまだしもでございませぬが、どうも根本的に、支那人は弱いえらくないもの、と思ふ

て居る兒があるやうに見えます。其一例を挙げま

すと、時時支那人の參觀者がございます時にあつて「今の支那人はえらい支那人である支那人の中

にえらい人は澤山ある」と話しますと「それでも先生支那人が弱くて日本の兵隊に負けて居る繪が

ありました」とか「誰さんは支那人は弱いと言ひました」とか「あの支那人は日本の兵隊さんと戦

をしたらどうですか」とかいろ／＼の反問を出します。之等は幼兒が見聞上、又は比較といふ考

から、自然に出るのもございませぬけれども、中には支那人は弱いものと思つて居るから出る詞や問

も随分ございませぬ。

▲こういう風な考を抱いて居るのは、どういふものでございませぬ。大きく言へば國と國との關係上どうでございませぬ。之が譯の分つた大人なら

ば、嘗ては我國が勝つたしかし何時までも支那を侮るのには良くない、と思ひませうが、幼児はそんな事は考へないで、只戰場に於ける支那人のみが深く腦裡に染みて居る爲に、絶對的に支那を弱しとして居るのであるのではございませうか。之は全く戰爭當時の勝ちほこつた大人の考、話、書草紙などが、今に残つて居る爲に、其後生れた幼児までがこういう風を考へて居る事と思ひますわ、實に幼児に對して大人は、一の話一の書を見せるのもよく、考へた上でなければなりません

▲明治二十七八年に日本が支那に勝つたのは、事實なのですから、之を話したり、書を見せたりして忠君、愛國、同情の心を養ふのは結構な事でございませうけれども、もし其時に、支那人を何時までも侮るやうな考、又あの戰場に於ける支那人の

みをまだ何にも知らぬ柔かい幼児の頭に注ぎこみましたならば、もう其話も其書も有害なものとなりませう、ですから此戰爭なり、其話なり、書なりを良く用ひて活かせる事が必要でござりませう。

▲支那人に對してうれふべき考を有て居る幼児は多くは譯の分らぬ下等社會の家庭に育てられて居る幼児に多いのでございませうから、以上述べましたのは日本今日一般の事として申したのではございませう。社會の一隅には、今でもこんな事が残つて居るといふ事を、深く感じますあまり記しました。

